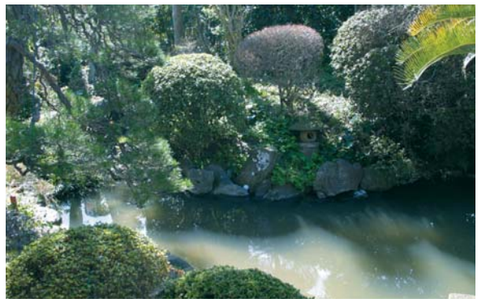
城下町の名残

柳川は、江戸時代には立花12万石の城下町として栄え、いたるところにその名残をとどめています。
近年、開発がすすむにつれて徐々に失われつつありますが、その風情ある景観は今後も残していきたいものです。

御花と松濤園　新外町（MAP 2-⑫）

柳川藩主立花家の別邸として建てられたもので、このあたりの地名から「御花」と呼ばれるようになったといわれています。現在の建物と庭園は、明治41（1908）年から43（1910）年にかけて作り直されたもので、明治建築様式のモデルでもあります。
庭園は、日本三景の一つである松島を形どって造られたといわれ、豊富な水と山石、海石、古雅な数百株の翠松を配しており、昭和53（1978）年には国の名勝に指定されています。



池泉式庭園を持つ武家屋敷　鬼童町（MAP 2-⑭）

九州でも特異な、掘割と一体となる水系をなす池泉を持った庭園はかつて柳川城下町では一般的だったようですが、現在ではわずかとなってしまいました。代表的なものとしては旧戸島家住宅が挙げられますが、それ以外にも鬼童町南部に数軒残っており、水といやしの空間として貴重な柳川の顔です。

旧戸島家住宅と庭園　鬼童町（MAP 2-⑬）

寛政年間（1789～1800）に建てられ、その後藩公の茶室として使われていた、数寄屋風の葦葺屋根の住宅で、柳川地方の武家住宅の典型例として、昭和32（1957）年に建物と庭園がそれぞれ福岡県の文化財に指定されました。
庭園は、掘割の水を引き入れて作られた築山山水で、規模は大きくないものの水流を主眼とした珍しい座観式茶室庭園であり、昭和53（1978）年には国の名勝にも指定されています。
母屋を解体修理の後、現在は一般公開されています。

十時邸　新外町（MAP 2-⑮）

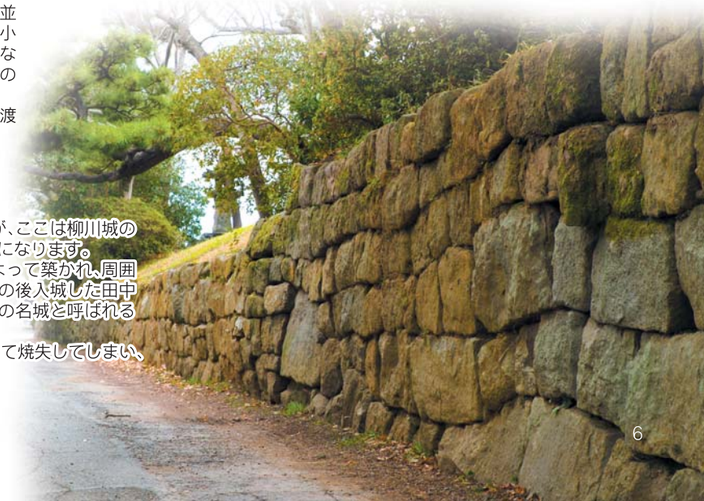
城下町であった柳川には、かつて多くの武家住宅がありましたが、現在当時の姿を残しているものは、ほとんどなくなってしまいました。市内に残る武家住宅は、その歴史的価値だけではなく、風情のある景観としても貴重なものです。
中でも十時邸は、屋敷地と建物が揃って残る武家住宅として、旧戸島家住宅と並び専門家に高く評価されており、貴重な歴史建造物であると同時に、川下りコース沿いの素敵なビュースポットでもあります。

袋小路と渡辺家住宅　袋町（MAP 2-⑯）

袋町はかつて袋小路と呼ばれ、周囲を堀に囲まれ出入口が１つしかない、その名のとおり行き止まりの町でした。現在は家並みも変わり、小路も通り抜けできるようになっていますが、城下町東部に残る数少ない武家屋敷である渡辺家住宅と袋町の生垣が造り出す一角は、往時の柳川の小路を偲ばせます。
市街地の雑踏から切り取られ、東部は並倉や長命寺の林まで広く見渡せる気持ちのいい小路です。

町家の家並み

江戸時代の街道沿いなどによく見られる古い「町家」が市内にもわずかながら残っています。入り口が狭く奥に長い「うなぎの寝床」といわれる敷地の形状のため、間口の狭い家々が連なる様は、当時の町並みを想起させます。



柳川城址　本城町（MAP 2-⑰）

柳城中学校校庭の一隅に、石積みの小高い丘がありますが、ここは柳川城の天守閣の跡です。その東側の柳川高校は本丸と二の丸の跡になります。
本城は永禄年間（1558～1569）に蒲池鑑盛（あきもり）によって築かれ、周囲に水路を張り巡らせた難攻不落の堅城でした。さらに、その後入城した田中吉政の手により、城塁、櫓、五層の天守閣が建造され、天下の名城と呼ばれるようになりました。
以来、柳川藩の象徴でしたが、明治5（1872）年の失火によって焼失してしまい、現在ではわずかに残る石垣がその痕跡を留めています。